永野　花歩（ながの・かほ）　長崎市立三川中学校２年

作品名　「夫婦の一日」を読んで思ったこと

読んだ作品　「夫婦の一日」

私は、遠藤周作さんが書いた『遠藤周作短篇名作選』の中の一篇「夫婦の一日」を読みました。

このお話は、キリスト教信者であるとある夫婦のちょっとした喧嘩の内容を書いているものです。主人公の家では、お手伝いさんが亡くなってしまったり、主人公(夫)の体調が優れなかったりとよくないことばかりが起こっていました。それを不安に思った妻が占師の元へ行き、預言を聞きました。その預言とは、「放っておくと、あなたの御主人に大きな不幸が来る。良くないことが起こらないためには、鳥取に行かなければならない。」というもの。主人公は、カトリックであるというのになぜそのようなものを信じるのかと声を荒げます。口をきかぬことで、どれほど自分がこのような迷信を嫌っているかを見せようとし、その日、口をききませんでした。そしてやはり、妻はその夜「あんなところに行ってごめんなさい」と謝りました。そこで一件落着かと思いますが、そうではありません。妻は、鳥取に行けというのです。もちろんそれを断りますが、また別の日もこのことだけはとそのことだけを繰り返しました。その後、神父に「行ってやりなさい」と言われたこともあり、二人で鳥取に向かいます。どういう結末なのかは実際に物語を読んで確かめてください。

私がこの一篇を読もうと思った理由は、この内容で筆者はどういう話を書くのか気になったからです。それぞれの形があるはずの、夫婦の日常。その日常も全く同じ日は、絶対にない。そこで、どのような「一日」を書いているのか、興味をもちました。

この作品で、私の中で特に印象に残っている場面があります。

その場面は、妻が夫に「ごめんなさい」と謝っても、どうしてもといって、自分の考えを曲げなかったところです。いつもは、宗教関係のことになると逆らったりしない妻が、こんなにも自分の意見を押し通そうとする理由は、それだけ夫のことを大切に思っているからだと思います。私が小学校低学年の頃、大事にしていたぬいぐるみがありました。しかし、大きくなってくるにつれ、そのぬいぐるみを放ったらかしにしておくことが多くなっていきました。ある日、家族みんなで掃除をしていると、家族が、そのぬいぐるみは大きく、場所をとってしまうので捨てようとしていました。それをみた時、最近は放ったらかしにしていたのに、絶対に捨てられたらだめだと思い、必死に説得しました。その時、「ああ、やっぱり大切なものは、いつまでも自分の中では大切なんだな」と思いました。私は、ぬいぐるみ一つでこんなに必死になっていました。しかし、どうでもいいようなものだったら、ここまで必死になりません。それと同じで、妻も、自分の夫に絶対に死んでほしくない、これからも一緒にいたいという思いでずっと自分の意見を貫き通したんだと思います。私は、そんな妻の思いの強さに、感動しました。

この物語を通して、私は垣間見える相手への思いというものも大事だということを学び

ました。相手への思いがなければ、誰かになにかをすることはないので、なにかしてもらったら「ありがとう」という感謝の言葉を忘れないようにしていきたいです。また、自分からも困っている人には声をかけたり、なにかしてもらわなくても感謝を伝えるようにして、いい人間関係をつくっていきます。